

『障害児保育・30年』

—子どもたちと歩んだ安来市公立保育所の軌跡—

鯨岡峻十安来市公立保育所保育士会編

ミネルヴァ書房 2005年9月10日発行

本書は30年間にわたり一地域の公立保育所で障害児保育に取り組んできた実践と研究を振り返り、保育者が中心となってまとめたものである。安来市の実践的取り組みが、市の組合の支援及び各分野との共同作業によってどう発展してきたかがよくわかる。全体の約2/3は、30名以上の人々が自らの実践の意義を掘り下げ書いているが、その中で多くの人が「偉大な指導者」として触れている故・大石益男は、編者の鯨岡峻十に実践の大切さを教えた人だという。また彼は熱い思いで安来市の保育士や障害児の家族を強く引き付けたが、志半ばで病に倒れてしまった。本書は大石への鎮魂碑の意味をも込めて執筆されたようである。

<安来市の障害児保育の特徴>第1の特徴は、重度・重複障害児を保育士たちがすすんで受け入れてきたことである。なぜそこまで出来たのかといえば、それは保護者の辛い日々を思い、なんとか子育ての手助けをしたいという熱い思いがあったからだという。これはまさに、今の子育て支援の考え方を先取りしたものといえよう。

第2の特徴は、真の「統合保育」を行ってきたことである。全国には健常児保育の片隅に置いているだけの名ばかりの「統合保育」が行われているところもある。それを統合保育だと錯覚している現場に対して、この実践は大きな示唆をあたえるだろう。鯨岡は編集を引き受けた一番の理由を真の統合保育を高く評価しそれを全国に発信したいと思ったからだ、と編者の前書きに記している。

<本書を評価する点>第1に、実践的積み重ねの省察、検討が必要であると知りながら、多くの現場ではなかなか形にまとめるまでに至ら

ないでいる。本書はその点で実践を整理し考察することの有効性を示唆する著述となっている。実践をまとめたことで、執筆した保育士たちばかりではなく読み手にとっても自分たちの保育と比較検討することができるなど、非常に得るものが多い1冊である。

第2に、障害児保育は個々の保育者の力量のみで支えきれないため、研修会、個別相談、交流保育、療育や医療の専門家などによって支えられてきた、との紹介があるが、こうした地域での実践のネットワークが有効であると保育者が確認し記していることに注目したい。本書は今後の実践者と研究者の関係の1つのあり方を示し、当学会の方向性へも示唆を与えている。

<海外の思い出>私事で恐縮だが本書を読み、20年前にわが子を連れて通った英国のC幼稚園を思い出した。そこは約半数の子どもが障害を持ち、何種類ものセラピストが保育に加わっている統合保育園だった。ある日3歳のわが子が、サリドマイドの子と車の取り合いになった時、思わず「手を放しなさい！」と叫んだ筆者に対して、その子の母親が「なぜ取り合いをやめさせたのか」と本気で怒ってきた。障害を差別させない強い母親の抗議にたじたじとなったあの時のことは忘れられない。こういった実践は地域や国境を越えて情報交換できたらよいのにと考えたりした。

なお本書に対して欲をいえば、この実践は今後どう発展していく可能性があるのかを明らかにしてほしい。また複数執筆のため無理もないが、同じ内容が何人かで重なって書かれている点をもう少し推敲できれば読者にとって読みやすくなると感じる。

<受賞について>保育学会は保育研究と保育実践の協働によって子どもの幸せを目指している。学問的研究ばかりではなく優れた実践をもとにした研究にも光を当てたいということで、この地道な取り組みが選考された。これが他の多くの保育実践者の励みになれば幸いである。

(東京家政大学 細田淳子)